校内研究　中学部

＜研究主題＞　　「多様化する児童生徒の学びを支える指導・支援のあり方を探る」
＜サブテーマ＞　「生徒一人一人が課題を克服していくための組織的・継続的な取り組み」

1　目的
（1）生徒の課題の整理、適切な目標の設定を行い、組織的・継続的な支援を検討・実践する。
（2）検討・実践した支援をグループ内で共有し、日々の指導・支援の改善に役立てる。

2　研究内容
（1）各学年生徒１名を抽出して目標を設定し、支援・指導の計画、実践、評価、振り返りの事例研究を行う。
（2）外部講師を招き、教科学習や自立活動等の学習活動を通じた組織的・継続的な生徒とのかかわりについて研修会を行う。

3　研究方法
（1）事例研究
学年ごとのグループで生徒を１名抽出し、事例研究を行うものとする。必要に応じて Co-MaMe や自己理解カード等の支援ツールを活用する。

〈事例研究の PDCA サイクル〉
①計画…対象生徒のアセスメント→実態把握に基づく具体的な目標の設定
（登校状況、授業の取り組み、生活態度）教育支援計画、個別の指導計画の見直し
②実施…具体的な目標を踏まえた学習活動の実践
（授業研究の実施、教材・教具の工夫　等）
③評価・改善…設定目標と実践結果、記録の照らし合わせ
（授業の姿、行動記録等から目標の達成度を検討）
④まとめ…学部研究で①～③の流れを報告・共有
（他学年を含め、今後の実践に向けた意見交換）

（2）研修会
各学年で行った事例研究を発表し、外部講師の先生から助言をいただく機会とする。

4　研究計画

	月	研　究　内　容
1	4/21（木）	全体研究会「今年度の校内研究について」
2	5/23（月）	学部研究①「今年度の学部研究で取り組みたいこと・意見交換」
3	6/3（金）	学部研究②「研究内容等の検討」
4	7/4（月）	学部研究③「目的・研究内容・研究方法・研究計画の検討」
5	7/14（木）	全体研究会「各学部の研究内容・研計画究について共通理解」
6	8/22（月）	学部研究④「情報の収集と実践内容の検討」各学年毎
7	9/6（火）	学部研究⑤「実践経過の共有と検討①」前半：学年　後半：学部
8	10/21（木）	学部研究⑥「実践経過の共有と検討②」前半：学年　後半：学部
9	11/11（金）	学部研究⑦「研究実践のまとめ方の検討」
１０	11/24（木）	中学部ケース検討会　助言者：宮城教育大学教授　植木田　潤　氏
１１	12/12（月）	学部研究⑧「研究実践のまとめを整理する」
１２	1/19（木）	学部研究⑨「研究実践のまとめを整理する」
１３	2/8（水）	学部研究⑩「研究実践のまとめとアンケート記入」
１４	2/27（月）	全体研究会「今年度の学部研究のまとめについて共通理解」

5　研究報告

〈指導実践シート　１年生〉

1　対象児童生徒について
　中学部　１年　男子

2　今年度の指導
　中学部入学してから１カ月は、中学部のルールに従い１日６時間の授業を受けていた。入学当初は「１人でよかった」と話していたが、４月末頃には「（１人で）寂しい」「疲れた」「（中学部が）思っていたのと違う」といった発言があった。その後、GW明けから不登校が始まった。

（１）生徒の課題
・毎日登校する。
（２）指導目標
・安定した登校を目指す。

4　取り組みの方法、本人の様子

支援者の取り組み	本人の様子
（１）「登校の促しの時期」 〇学園担当と現状の確認と今後の対応について話し合った。（話し合い①） 〈学校〉 ・毎日学校の様子を伝える通信や課題を定時（10 時半）に学園に持っていく。 ・学習プリントや制作活動などの課題を出す。 〈学園〉 ・毎朝登校の促しをする。 ・日中の学園の居心地がよくなりすぎないように本人と関わる回数を減らした。 〇学園担当と現状の確認と今後の対応について話し合った。（話し合い②）	・「担任に会いたくない」と話し、学園の玄関には出てこなかったため、担任が通信や課題を直接渡すことができなかった。 ・別なタイミングで副担任と会った際は「元気にさぼってます」と話した。 ・通信は、一旦受け取り一通り目を通した後すぐに職員に返している。 ・学習プリントを破こうとしたり、本人が好きな制作課題も、学校から来たものだとわかると拒否した。 ・昨年度の担任などの写真が載っている通信は大事に保管している。 ・職員の促しに対し「学校には行かない」と話し、職員からの声掛けに対しのらりくらりとかわす様子がみられる。 ☆学校のワードや校舎に近づくのも拒否するようになるなど、拒否感が少しずつ高まっていった。
（２）「アプローチを減らした時期」 〇本人の拒否感を受けて、対応についてスクールカウンセラーさんに相談した。	・学校に近づかなくなった。休日の学園での活動の際にも学校方面には足が向かない様子が見られた。 ・「学校が嫌だ」と話すが、具体的な理由はうまく説明できない。

〈スクールカウンセラーさんからのアドバイス〉 ・今はエネルギーを回復している時期である。 ・登校のきっかけを探しており必ず登校に向かう時が来るから、それまでは待つ姿勢でいい。 ・本人に会えなくても学校からのお知らせプリントは続けた方がよい。 ・本人が「やりたい」「面白い」と思えるような活動を提示する。 ○スクールカウンセラーさんからのアドバイスを学園と共有し、今後の対応について確認した。(話し合い③) 〈学校〉 ・本人の拒否感の高まりを受け、課題の取り組みを無くし、週１回の通信で学校の様子を伝えるようにした。	・いたずらをする頻度が増え、危険性の高いいたずらもあった。 ・園内をウロウロして職員の後追いをするなど、関りを求める行動がみられた。
（３）「学園主体で取り組みを行った時期」 〈学園〉 ・学園担当が本人と日中の活動について話し合う。 →本人の好きな畑作業と草刈りに取り組む。 ・学校と学園で連絡を取り、学園での活動（主に畑作業）の際に教員が出向き自然にコミュニケーションを取るようにした。 ・活動後、本人の気持ちの聞き取りをしてもらった。 〈学校〉 ・学園と連絡を取り、情報共有をしてから学園での活動（畑作業）の場に行き、本人の様子を見ながらコミュニケーションを図った。 （1 回目：学年長　2 回目：学年長、担任 3 回目：学年長、副担任）	・作業する畑に名前を付け、植える野菜や収穫後の販売や加工の仕方についても自分なりの企画を立てた。 ・畑の土起こしや草刈り等を職員と一緒に、積極的に取り組む。 〈1 回目〉 ・「来ないで」と言いながらも雑談には応じ、その後育てている椎茸等を自分から学年長に見せた。また、学園での生活の様子についても話した。 →学園職員に「まだ先生たちには来てほしくない」と話す。 〈2 回目〉 ・1 回目同様に「来ないで」と軽く拒否しながらも、同じような流れで育てている野菜をどのように植えるかなどを説明した。表情は穏やかだった。 〈3 回目〉 ・学校付近で草刈りをしている時に教員に話しかけられると、草刈り機を止めて機械の使い方などを教えるなど、コミュニケーションを取る機会が増えた。 ・学園職員との会話の中で学校のワードが出るように

	なった。 ・学校近くまで来る様子がみられた。
（４）「登校再開」 〈学校〉 ・本人の様子を見ながら１時間程度、休んでいた時の学園での様子を聞いた。 ・活動量を調整しながら学習を行った。	・「学校に行く」と自分から職員に話した。 （１０時登校、11 時半下校） ・学園での様子を話した後、「明日は朝から学校に行く予定だ」と話した。 ・学園に帰ってから「今日学校行ってきたよ」と自慢げに話す。 ・翌日は朝から登校し、授業を受けた。

5　まとめ、考察

（１）本人の様子について

入学後、6 時間授業を受ける、ルールに従って生活をする等、慣れない環境の中でかなり頑張っている様子がみられた。小学部での様子と比べると、授業態度や服装など全てにおいて非常に立派であった。その本人の頑張りを出来るだけ褒めて、励ましてきた。しかし、中学部への期待から頑張り過ぎたこと、1 ヶ月頑張ったことで疲労が溜まったことから、登校できなくなったと考えられる。

登校の促しをするため取り組み（１）を行った。学校でも学園でも促したことで更なる負荷が加わり、学校への拒否感が高まってしまったと考えられる。

スクールカウンセラーのアドバイスを受けて、学習課題の取り組みを止め取り組み（２）を行った。本人のエネルギー回復時期と捉え、見守る姿勢で学校の様子を伝える通信のみ渡すことにした。学校のアプローチを減らしたことで負担感は減ったと思われるが、この時期に、学園でのいたずらが増えている。

スクールカウンセラーのアドバイスを受け学園と協議して、「本人がやりたい活動の設定」を学園主体で行う取り組み（３）を行った。学園職員と関わりながら本人の好きな活動を行うことで、表情が良くなりいたずらも減った。愛着に問題のある本人にとって、大人が十分に関わりながら好きな活動を行うことで、本人の気持ちが満たされ、教員とのコミュニケーションが可能になったと思われる。そして、学校へ目が向き、登校再開に繋がったと考えられる。

（２）環境設定について

昨年度までは、同級生や関係性ができていた教員がいたことで本人にとって安心できる環境ができていた。また、小学部では、担任が本人のペースに合わせて一日の学習を調整してきたが、中学部では、教科担任制になり、小学部のように担任が調整することが難しくなった。同級生がいない一人学級になり、初めは喜ぶ様子がみられたが、「(一人で）寂しい」との発言があった。ほとんどの授業で先生と 1 対 1 となり常に先生の目が自分に向くということが辛くなってきたことが予想される。そのため、生徒が一人の場合、合同授業の計画や教室の配置を工夫するなど、できる限り生徒同士活動する場面を設定する必要があると感じた。環境変化への適応が難しい生徒に対して、小学部での支援を受けて、中学部でどのように支援していくのかを早急に検討していく等、学校の枠組みや対応を柔軟に変化させる必要がある。

（３）連携について

学校、学園で情報を共有しながら対応を検討し、専門家のアドバイスを参考に共通理解をして対応を切り替え、本人に合わせた活動を設定したことが、登校へとつながったと考えられる。今回の取り組みをとおして関係機関との連携の重要性を感じた。

さらに、小学部から中学部へ入学してくる生徒については、早めに情報交換の場を設け、支援体制を整える等、スムーズに中学部へ移行できるように学部間の連携を密にしていく必要がある。小・中の 9 年間を見通した継続的な支援を行うことができるように校内連携を深めていきたい。

＜指導実践シート　２年生＞

1　対象児童生徒について

中学部　２年　男子

2　今年度の指導

（１）生徒の課題

精神疾患のある児童生徒の教育的支援・配慮アセスメントシートを２学年職員で実施した。その結果、優先して取り組む教育的ニーズを A4：意欲・気力、F5：ストレスへの対処の２つに絞った。

（２）指導目標

・苦手な教科や活動にも、参加しようという気持ちをもって取り組もうとする。（A4：意欲・気力）

・ストレスがたまった際の対処方法を増やす。（F5：ストレスへの対処）

3　取り組み方法（教科、学習グループで取り組んだ内容や成果・課題　等）

（１）整理用シートの活用

・整理用シートを用いて課題・支援・配慮事項が明確になった。

（２）教科ごとの取り組み（A4：意欲）

・導入時の工夫（タブレットや実物）

・小テスト、ドリル、検定等での意欲喚起

・自己選択の機会の保証

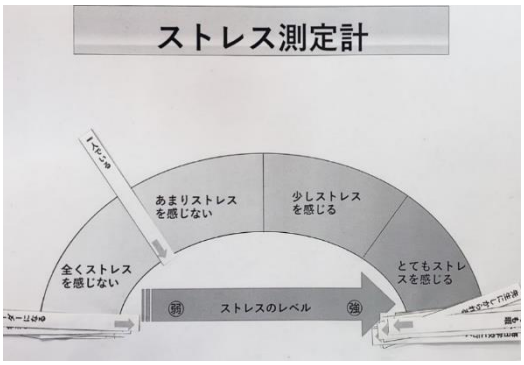
・授業の流れを提示し見通しをもたせた

・友人と協力し切磋琢磨することで意欲が向上した

（３）養護教諭によるストレス測定表の授業・保健室の利用について

32 種類のストレス項目を本人が分類し、ストレス測定表に貼った。とてもストレスに感じる 26 項目、まったくストレスを感じない５項目、中間が１項目という分類の仕方だった。このことから、本人の感じ方が極端であること、快と不快の感情の分化がまだ発達段階にあることが分かった。

部屋が散らかっている、汚い
↓
学校に入学する、転校する
↓
掃除や整理整頓をする
↓
大きい音が鳴る
↓
眠い
↓
眠れない
↓
人が大勢いるところに行く
↓
一人でいる
↓
とても暇
↓
やらなければいけないことが多く忙しい
↓
何かに失敗する
↓
集団行動をする
↓
細かい作業をする
↓
イヤなことをしなければならない
↓
きまりを守る
↓
自分の顔やスタイル
↓
自分の性格
↓
友達との関係がうまくいかない
↓
親（学園の職員さん）にしかられる
↓
異性との関係がうまくいかない
↓
先生にしかられる
↓
先生との関係がうまくいかない
↓
進路や将来のことを考える
↓
毎日学校に行く
↓
テスト
↓
学校の成績のこと
↓
大勢の前で発表する
↓
リーダーになる
↓
じっと待つ
↓
急な予定変更
↓
相談できる人がいない
↓
親（学園の職員さん）との関係がうまくいかない
↓



↓

とてもストレス

（５）保健室利用の推移等の把握

このことを受けて、本人の状態などをこまめに情報交換しながら、保健室利用をするようにした。保健室の利用の前後で、疲れやイライラを聞き取り数値の変容をみた。（イライラ・眠気 10 段階自己評価）高い数値（８～10）で保健室を訪れることが多く、ベッドでの休むと２程度数値が下がる傾向がみられた。保健室利用は、月平均で 10 回弱の利用。１週間に２～３回程度の利用で安定している。

（４）ストレス対処方法の獲得に向けて

イライラや疲れた時、保健室静養で寝るだけでなく、学習室での休憩が使えるようになることを目標とした。別室の利用方法を複数提示しながら本人への利用を促した。当初、一人では暇だという理由で別室利用を拒んでいた。本人の好きなぬいぐるみ、休憩しやすいようなタオルなどを備え、イラストを描くことを提案したりした。利用回数が、７月１回、８月２回、10 月１回、11 月４回、12 月１回と春に比べて微増してきた。本人にとって保健室静養が一番ではあるが、保健室で休むまでもない時や既に保健室静養を 50 分間使用しきったあとの休憩手段としては選択肢の一つになりつつあると思われる。

４　これからの方向性

アセスメントシートの２回目からの変容でもわかるように、各授業において本人の意欲向上に向けた取り組みは一定の効果が見られた。

ストレス状態が高まり、一人ではどうしようもない時などに、自分から先生に相談することも何度かあり本人なりにストレス対処についての意識も高まりつつあるが、今後もストレス対処法の拡大を目指し支援していく必要がある。

＜指導実践シート　３年生＞

1　対象生徒について

中学部３年　男子

2　今年度の指導

（1）生徒の課題

【心理】意欲・気力（目標がもてない、やる気がおきない）

【心理】気持ちの表現（気持ちを言葉・文字に表せない）

【学習】読み・書き（文章を読むのが苦手、漢字を正しく書けない）

（2）指導目標

【長期目標】・得意、不得意に関わらず、最後まで集中して取り組むことができる。

・１日の予定に見通しをもち、時間を意識して行動する。

【短期目標】・気持ちやストレスの状況を教員と確認しながら、授業に参加できる時間を増やすことができる。

・予定を確認し、次の行動の切り替えが早くできるようになる。

3　取り組み方法

（1）保護者との連携

登校渋りがあったときや生徒の気持ちが不安定になったとき等に、保護者と将来のことについて話し合いをしたり、目標について確認したりした。その結果、少しずつ朝から登校できるようになる等変化がみられた。

（2）領域・教科での指導

①自立活動（個別指導）

・散歩・・・外に出て、自然に触れながら興味・関心のあるものを見つけ、気持ちの安定を図る。

・レクリエーション活動・・・他者とのコミュニケーションを通じた交流を通して、気持ちの安定を図り、意欲につなげる（カードゲーム、バドミントンなど）。

【指導中の様子】

・自分の興味関心のある虫や植物などの観察をすることで、気持ちを整えることができた。

・指導者が視線を外し、同じ方向を見ながら会話をすると、比較的楽にコミュニケーションをとれるようになった。

【変容】

・その日の本人の体調や気持ちによって活動にのれなかったりすることもあったが、自分が取り組みたい活動を選択できたときは、コミュニケーションも比較的よくとり、意欲的に活動していた。

②国語（小集団）

・穴埋めプリントの使用･･･記述に対する抵抗感を軽減する。

・ミニホワイトボードによる支援・定期テスト(漢字の書き取り)の選択肢。漢字を正しく書く。

・ひらがな表記の許容・定期テスト(記述問題)での字数制限の排除・対話による気持ちの聞き出し、自分の考えを表現できるようにする。

【指導中の様子】

・板書の書き写しについては、記述部分が少なければ抵抗なく取り組んでいる。ただし、漢字の部分をひらがなで表記することも少なくない。漢字で書くように促すと、素直に従うことが多い。

・面倒になると、漢字に直さなかったり、書き写しするのをやめたりすることもある。

・新聞記事など、自由に記述できるものについては、ひらがなでスラスラ表現している。

・文章の感想などは、記述させると一言で終わってしまうが、対話や発言の中で出た言葉を拾ってあげると、付け足して記述している。

【変容】

・昨年度と比較し、文字を書くことをあまり嫌がらなくなり、漢字を使って書くことが増えた。

・分からない漢字を教科担任に聞くようになった。

③社会（１０月～個別指導）

・授業の見通しのため、取り組む内容を始めに黒板に掲示した（８回掲示し、それ以降はパターン化できたため終了）。
・授業の導入にニューストークを行い、自分から発信するウォーミングアップのような時間を設けた。
・プリントを用意し、書く箇所を大幅に減らした（マーカーの箇所は増やしている）。
・プリントとモニターをリンクさせ、書き写す文字は白地と赤とした。
・資料集、教科書は綴じさせ、注目してほしい記載はモニターに映した（見るべきものを絞った）。

【指導中の様子】

・ニューストークが軌道に乗り始めた頃、自分からニュースや話題を意識して過ごすようになった。
・９月から社会は個別指導形態になった。始めの３回は教師を試すような行為（突っ伏す、不必要なものを出す、なかなか着席しない等）が見られたが、授業内容は変更せず、最初に示した通りに進めた。それ以降は不適切な言動は見られていない。
・モニターに書き写す用語が出てもすぐに書き始めないことがある。（ワンテンポ遅れる程度）その際は「書きます」といってから用語を読み上げるなどすると、静かに書き始めることができた。

【変容】

・授業の開始がスムーズになった。
・書くことの抵抗感は減少したようだが、画数が多いとひらがなで書き写している。（それも良しとした）
・授業とは別の資料集などのページを勝手に見ている場面はなくなった。
・ニューストークのために、ニュースを見てくることが増えた。
・授業の欠席回数が減った。

④数学（個別指導）

・基礎計算では、１桁＋１桁の計算を中心に、百マス計算に取り組んでいるが、気持ちの状態によって集中できなかったりすることもある。かけ算、九九は全部は覚えておらず、特に７～９の段を忘れている部分が多い。
・中３の学習内容に触れつつ、中１の内容を中心に方程式などから考え方を丁寧に言葉で説明しながら行った。

【指導中の様子】

・授業では、割り算の考え方などに苦戦していたが、テストでは方程式などをきちんと正答していた。ただし、理由は分からないまま、数操作だけで解いているように見受けられる。
・授業中、「中３の内容は分からないからやりたくない」「中１の内容は、自分が中３なのでやりたくない」などと発言することがある。筋道立てて考えることに慣れていないため、計算などの苦手意識から数学の学習に向き合えないことがある。

【変容】

・調子が良いときは、頑張って考えようという様子が表れ、少しずつではあるが、授業の中で学んだ考え方を活かして正答を導き出そうという姿勢が見られた。

4　これからの方向性

本生徒は、現段階で私立高校への進学が確定している。前述のように比較的少ない人数での学習環境ではあるが、ＡＤＨＤや自閉スペクトラム症などの本人の障がい特性に応じた（あるいは補う）配慮について、過大な期待や要求をすることは難しいと考えられる。３年後の社会自立を目指し、本校中学部での実態を綿密に進学先に伝え、高校での３年間が実りあるものになるようにしたい。

6　研究のまとめ

（1）成果

・関係機関、各学年、教科間で生徒の課題の整理や支援の目標を共有することで効果的な指導・支援につながった。

・アセスメントシートとストレスチェック表を活用したことにより、支援の方向性がみえてきて効果的であった。

・学年ごとの事例研究から、１年生は指導支援の目標設定とペース配分、２年生はストレス理解と対処、３年生は学びの困難さや自己理解の課題をかかえた生徒への支援の重要さを把握することができた。

・宮城教育大学教授 植木田潤先生を助言者としてお迎えし、学部ケース検討会を行った。対象は中 3 男子生徒。進学に関わっての高校との情報共有の方法や、生徒が抱えている課題（心理的な安定、学習のつまづき等）に対する指導・支援等について、具体的なアドバイスをいただくことができた。

（2）課題

・学年での共有にとどまり、学部で情報交換する機会が少なかった。各教科担当でも共有しておくことで、学習指導にも生かせることから、共通理解の場を設定するべきだった。

・学年ごとのグループで研究を進めたことで、年度初め１～２カ月ほどで登校状況が不安定になる生徒がみられた。生徒の実態が多様化していることから、今後はさらに一人一人の実態に合わせた指導・支援について組織的に検討する必要がある。(自立活動の時間割設定、テストの取り組み方、スモールステップでの指導・支援等)

・小学部・中学部の連携や関係機関の連携を図りながら、個々に合った最適な学びができるように検討していくことが必要である。

・生徒、教師ともに「３年間でこういう力を身に付けたい」という見通しがもてると、日常の学習や進路にもつながると考えられる。生徒の学びを支えるために、授業に入れるようになるための支援、安心していられる場の探索、キーパーソンの確保等を整理しながら支援していきたい。